
論文要旨

論文は次の第一編「有島武郎とキリスト教」(第一部～第七部)、第二編「作品研究」(I、II、III、IV)とから成っている。

第一編「有島武郎とキリスト教」

第一部「札幌独立教会脱会前と聖書」

第二部「裏切者意識と潜在信仰」

第三部「増子方式」

第四部「日記で話題にした聖書」

第五部「作品で話題にした聖書」

第六部「有島武郎が使用した『新約全書』」

第七部「悲運、有島武郎」

第二編「作品研究」

I 『三部曲』

II 「有島武郎の児童文学」

III 「その他の作品」

IV 「葛藤文学」

以上の目次に従って要旨を述べておこう。

第一編 第一部

1. まず“背教の根本原因は、完全主義、二元分裂的性格の有島がパウロと対決し、予定説を二重決定論に誤解したためである。二重決定論とは神による選ぶと棄却とが既決していると強調する論。二元分裂的性格形成第一要因、
幼少年時代にスパルタ武家教育と欧米流基督教の自由教育を同時に受けたため。第二要因、旺盛な性欲に悩む青年武郎と厳格ピュリタン。
2. 聖書誤解。26歳の武郎は創世記16~27章とロマ書9、10章を読み、次男イサクとヤコブには恩寵が与えられ、長男イシマエルとエサウは一方的に呪われていると誤解。幼少時から厳格な長男教育で躰を受けつづけた武郎はイシマエルとエサウに同情し、之にひいきの神、極めて不公平な神に反抗、ロマ書を書いたパウロに立腹する。
3. パウロよりヨハネ。更にパウロの結婚昏奨力かせずの文面が、續に障っていた武郎は、パウロの見逃罪重視よりも愛、アガペーと救しを強調するヨハネに傾倒していった。

- 4 しかし行為義認的意識の強い武郎は札幌市内での宗派の争い、教会内部の偽善的キリスト者の言動に嫌気がさし、次第に信仰も動揺。
- 5 そういう時期に東京本郷教会にて、汎神論的人間中心的な自由主義神学の方旗手・海老名弾正の説教「オリゲネス」(「神観」では天の父に祈禱、神の子ロゴスに祈禱すべきでない。「救済観」では十字架の贖罪を軽視。)に共鳴共感してしまう。(三世紀ヒエのアレクサンドリアではロゴス宗教が高調されており、ヨハネ伝が重視されていた。)キリスト教は儒教や神道と連続していると考える海老名であれば、自由主義神学と同じ思考であると誤解されやすいオリゲネスの神学思想(例えば「御子従位論」)の真意を誤解し、その思想の中で自分の考えと類似するところを誇張して説教に生かすことはあり得る。更に武郎は「藤村操の自殺」に対して同情心のない厳しい説教をする植村正久に反発しつつ、次第に正統信仰から離反して行く。明治30年代、まだ神学的基盤の固まらない日本基督

教界の動揺による犠牲者であると見做せよう。

第二部 カール・バルトによれば、ユダの行為こそイエスがキリストであるという真理を証言する実質的役割「引き渡し」パトローナイを果している、という。裏切者として後悔の末、自殺したユダはどにまでも「十二弟子の一人」「神の恵みの選び」のもとに置かれる人物であるとバルトは強調している。バルトのユダ観に立脚すると、ユダも有島もキリストに裏切意識をいなく自殺者としての共通性がある。潜在信仰なしに裏切意識もないからである。ユダが「神の恵みの選び」のもとに置かれるなら、武郎も「選ばれている棄てられた者(人間)」であるといわねばならない。更に内村金監三が積極的な神への奉仕者といえるなら、有島武郎は、彼の人生を弁証法的に考慮するならば(神を求め、求め得ず反逆、しかし影響から自由ならず)、消極的な神への奉仕者といわねばならない。

第三部 「増子方式」は第一部と共に主要論文になっている。日本の「近代文学とキリスト教」研究は、第二次大戦後ようやく盛んになってきた。本来、宗教とは、その人の実生活、神学する、文学するという仕事を含め、精神活動すべてを左右する程の重大さをもっている。研究対象とする作家が属する教会の教義信条を調査し、信仰生活と文学活動を研究するのは当然である。しかし一教派のキリスト教だけで研究対象者の文学と信仰生活を云々するのは危険である。より客観的で普遍的な研究成果を目的とするため「増子方式」を考案した。即ち、新潮と筑摩の全集何巻の何頁の何行目に、聖書何章何節の語句があるという基礎調査で、各聖書「一覧表」作成。日記と書簡10点、評論と感想6点、小説と戯曲3点、等に配点して同内容回数を参考に「内容別順位表」を作成。例えば「ヨハネ伝第1位」「姦淫の女」114点、創世記第1位「アダムの創造」101点、マタイ伝第1位「山上の垂訓」105点、と出てくる。

一 教派に偏る危険を避けるため、現在ある四大教会（正教会、公教会、聖公会、プロテスタント）を代表する神学者、司祭から、研究対象者の著作を共に読むことを通して質疑する。その結果得られた指摘、意見、感想、総括を集約。増子方式の成果として次の共通点を発見。

- ① 有島のヨハネ伝ではミサがない。
- ② 創世記ではアブラハムとヨセフの話がない。
- ③ ネピリムなど男女関係重視。
- ④ マタイ伝ではペテロが登場せず。
- ⑤ 神よりも人間第一の聖句多し。

第四部 新「有島武郎と聖書」回数別順位では旧約聖書22巻、新約聖書22巻、計44巻の聖書を話題にしている。

- 1. マタイ伝 (248回), 2. 創世記 (247回),
- 3. ヨハネ伝 (192回), 4. ルカ伝 (106回),
- 5. 士師記 (92回), 8. ロマ書 (53回),
- 10. 出エジプト記 (29回), 20. 詩篇 (20回), ……
- 44. ミカ書 (1回)。

以上の中で「日記で話題にした聖書」は次の

通り。

1. ヨハネ伝 (39回),
2. マタイ伝 (37回),
3. ルカ伝 (30回),
4. 創世記 (25回),
5. ロマ書 (25回),
6. 共観福音書 (21回),
7. 四福音書 (16回),
8. 詩篇 (8回),
9. マルコ伝 (8回),
10. イザヤ書 (7回),
11. ヨブ記 (6回),
12. コリント前書 (6回),
13. ヨハネ第一書 (5回),
14. 使徒行伝 (4回),
15. コリント後書 (4回),
16. テモテ前書 (4回),
17. ヤコブ書 (4回),
18. 黙示録 (4回),
19. 出エジプト記 (3回),
20. 雅歌 (2回),
-
27. テサロニケ前書 (1回),

以上、それぞれの期日、日記の原文中の聖句、注解書による聖句解説、有島がどのように聖句とかがわり合っているかを詳説してある。有島がヨハネ伝にほれ込んだ理由は次の四点である。

第一点 「女淫の女」の話がある。

第二点 ヨハネは愛の使徒と言われる。

第三点 思想的神学的に深い思考を要する福音書。

第四点 ユダの心理描写に秀れている。

第五部 「作品で話題にした聖書」でも

ヨハネ伝が一番多く150回に及んでいる。作品数は35種であるが、聖書劇「聖餐」が89回、評論「静思」を讀んで倉田氏に、「惜みなく愛は奪ふ」、イブセン「ブランド」が各4回。作品で話題にしたヨハネ伝の内容を回数順でみると次の通り。

1位(20回)「女淫の女」(8・1~11), 2位(18回)「ラザロの復活」(11・1~44), 3位(6回)「弟子の足を洗う」(13・1~21), (6回)「ベテスタの池で盲人を治す」(5・1~9), (6回)「父への道であるイエス」(14・1~14), (6回)「創造者であるロゴス」(1・1~5), (6回)「モーゼ蛇を上げる」「神は愛なり」(3・14,16), 8位(5回)「商人を糸縄で撃退」(2・13~17), (5回)「ベタニヤでの香油注ぎ」(12・1~8), 10位(4回)「世に月券つイエス」(16・25~33), (4回)安息日問答「神は働き給ふ、我れも亦」(5・17), (4回)「真理とは何ぞや」(18・38), (4回)「イスカリオテのユダ」(6・71, 13・2,26), 等である。「商人を糸縄で撃退」「我れも亦働き給ふ」には、イエスを

〈直接行動〉する〈即實主義者〉であると理解し、現実の社会悪に厳しく対処し、労働問題にも関心を深めていた有島の社会労働思想の特徴が出ている。

第六部 生涯で最も熱心な信仰生活を

続けた時期と言われる明治36年、その8月7日に購入した『新約全書 詩篇附』(明治34年8月26日発行 大日本聖書館)である。この『新約全書』には、どのような書き込みがあり、どこに傍線が引かれてあるかを調べた。14ヶ所ある。

マタイ伝 10・16, 21, ルカ伝 2・49, ヨハネ伝 12・23~28, コリント前 1・21, 27, 13・1~13, 13章, コリント後 5・4, ガラテヤ 2・19, 20, 21, 5・6, 14, 黙示録 13・10, 詩篇 23篇。

その結果、愛を賛歌、終末論的信仰を強調、キリスト者故の迫害、弱者と自責の念、等の読み方が分ってきた。伝道と研究の意欲に燃える頃の武郎が実在していた、ということが分る。

第七部 「悲運、有島武郎」

確乎たる信仰体験がなかった。

第二編 I 『三部曲』

第一部 「大洪水の前」

聖書に題材を求めた三部作「大洪水の前」「サムソンとデリラ」「聖餐」の主題は次の表の通り。

第一主題 神と人との愛

エホバと人々に対する或る調和する事の出来ない心の苦しみ。	神は人類を創造したことを後悔。(ノアの箱舟は神の恵み)
その心の苦しみに一種の然し、不満足な解決が与えられた。	神は背信のイスラエルを罰するためペリシテ族に襲撃させる。
その心の苦しみに円満な解決が与えられた。	「私は既に世に勝つた」という十字架の愛(アガペ)の宣言。

第二主題 男と女との愛

第一の戯曲に於ける男女関係。	ヤペテとナアマとの宿命的に結ばれぬ男女愛。
激しき破綻を起	サムソンとデリラとの

した。	愚かな男女愛。
或る正しい調和を得た。	イエスとマグダラのマリヤとの理想的愛。

「大洪水の前」と他の作品

1 横光利一「碑文」との比較

「碑文」の主人公は群羊集、「大洪水の前」は理想家ヤペテ。前者の主題は人間の有限性強調、後者は神の怒る愛とヤペテとナアマの男女愛、前者には洪水に動機を得てその極限状態における群羊集心理と言動を唯物的客観的に描写しようとする

意図、後者には旧約のエホバの怒りに動機を得てセツ族カイン族対立という神学的課題設定とその課題による神批判の意図、等の対比が論述されてある。

2 「首途」と予定説」では、有島がヤペテに仮託して神批判する原因は米国留学

中に遭遇したスコット氏自殺事件に起因することを論証してある。即ち、フランクフォード精神病院の患者・スコット氏は、弟の自殺悲報に自己の薄情痛感して教会出席、予定説を二重決定論と誤解して苦悩の末自殺する。この自殺事件は有島の信仰に大きな打撃を与え、帰国以後、有島自身が二重決定論に悩み、次第に不平等なる神への反抗に進展する心の推移を論じたものである。最初に、ノアの洪水と恩寵との関係を論じた大木英夫氏の説を導入し、この恩寵に懐疑するヤペテ、すなわち有島として論を進めてある。

《展開》 「大洪水の前」思想的考察

〔1〕〈セム〉十八世紀以前の思潮

十八世紀以前の歴史は古代から中世暗黒時代まで、対立、戦争、不信、憎悪の連続と理解する。義人セムの、教会的存在ナアマに対する態度に託して、十八世紀以前の思潮を象徴させている。

[2] <ハム> 自然主義的思潮

ハムはナアマの美を現実感覚のままに見る。弟ヤペテとナアマとの相愛事実を認め、宿命的敵対環境にある二人の境遇を重視してナアマを批難。合理的科学精神に基づき、空想的假定を排斥し、父、兄、神に対しても批判的懐疑的である。そして自己本能に拘束された言動を続けるハムのナアマその他に対する態度に託して、十九世紀から二十世紀初期までの自然主義的思潮を象徴させている。

[3] <ヤペテ> 到来すべき思潮

ノア家族以外の人々が洪水に溺れる時、必死に救助したセツ族ヤペテ。愛の神を求め、義の神を批判するヤペテ。カイン族ナアマを恋人とし、博愛と自由平等のため戦ったヤペテの態度に託して到来すべき思潮を象徴させている。

有島の自由な想定

① 絶世の美女であるカイン族ナアマはネピリム、

全人類救済精神で活躍するセツ族ヤペ
テモネピリム。

②二人の愛は宿命的に悲恋に終る。

第二部 「サムソンとテリラ」

1. 聖書のテリラが悪女であるのに対して戯曲
では激烈情熱女、愛すべき罪人、サムソンも単
に怪カナヅル人ではなく戯曲では愛情もあり
悲哀を秘める男になっている。

2. ヒロインのテリラは「大洪水の前」のナアマ、
「聖餐」のマグダラのマリヤ、「石にひしがれた
雑草」のM子、「或る女」の葉子と同タイプ。
性的悪魔性と純愛激情を秘める女性。
一方、「星座」のおぬい、「お末の死」のお末、
「迷路」のフロラ、「フランススの顔」のファニー
等は清純乙女派。主人公サムソンは「カイ
ンの末裔」の広岡仁右衛門、「或る女」の
倉地等、野性的豪快派に属し、「大洪水
の前」のヤペテ、「星座」の園、「或る女」の古
藤等は感傷的理想派に属する。女性像
も男性像にも二元性があり、上記の男女は皆

有島の分身なのである。

3. サムソンとデリラの愛と「大洪水の前」のヤペテとナアマの愛には、彼等の属する宗教社会的環境が互いに敵対状況である故に結実せずという共通点があること、結核の妻安子看護中における執筆時期とナアマ、デリラの死との関連、ユダがイエスに、サムソンがエホバに、デリラがサムソンに、有島が神に、それぞれ共通して抱いている意識は裏切者意識であること。

4. 『三部曲』の旧約（「大洪水の前」「サムソンとデリラ」）の神が苦悩・忍耐・義の神であった。そして義なる神はついに新約「聖餐」において十字架の贖罪、つまり愛・アガペーなる神に推移している。正に〈円満な解決〉は「聖餐」のイエスを待たねばならなかった。かく見てくると『三部曲』第一主題「神と人との愛」に示される有島の聖書理解が是認されることになる。

第三部 「聖餐」

「姦淫の女」「マグダラのマリヤ」「ベタニヤのマリヤ」「罪の女」この四人の女は同一人物ではない。しかし有島の同一人物構想には芸術的意図があった。四人の女性を同一人物視する有島の「マグダラのマリヤ」観は次の通り。姦淫癖、七つの悪霊を追い出され、姦淫罪石打刑から救われた罪深い情熱のマリヤは、イエスを敬愛し続ける。敬愛は話を聞き入るうちに信仰に変る。その信仰的予感からマリヤは、ナルドの香油をイエスの足に注いで葬りの準備をし、十字架を最後まで見守り、復活のイエスに最初に対面する。有島のマリヤが以上のような構想であったとしたら、性欲に悩み愛のキリストを強調した有島らしいマリヤ観であると言えよう。

Ⅱ 有島武郎の児童文学

1. オスカー・ワイルド「幸福な王子」の燕は死んで、
炉で溶けない王子の鉛の心臓(永遠の命の
象徴と思われる)と共に捨てられる。しかし天使
を通して神の祝福が王子と燕に与えられる。
正に「幸福な王子」である。有島の翻案「燕
と王子」では王子の像は溶かされくお寺の鐘
となり、その響きはく悪い者くをく居たたま
れない様にくすることで終っている。仏教的
因果応報思想が結末に出ている。鐘の音つ
まり自分から出る音は清いということは自己肯定
であり、結局王子は裁き主になっている。「幸福
な王子」には己の善行で悪人を裁くのではなく
く神への絶対的信仰がある。「燕と王子」の
王子が武郎の分身であると考えれば、近代
日本のキリスト教的作家には、この自己肯定が共
通してあるのに気付く。太宰治、島崎藤村。
2. ユング心理学の立場で見ると、生活童話と言わ
れる有島童話八編に共通していることは、「影の
発散」と「太陽神話類型」に属していることである。

即ち、死の恐怖、エゴイズム、盗みの体験という影が無意識層に潜在し、その鬱憤^{本意本}発散作用つまりリビドー投射作用によって創作がなされているという成立過程を説明してある。更に「一房の葡萄」では「明日は學校に來なければいけませんよ」と先生に言われ、少年は行くか否かその夜悩む。翌朝、ジムが飛んで來て握手。先生から二人への葡萄は愛の象徴、というように暗から明、夜の苦悩から朝の歡喜へと進轉する「太陽神話類型」に属していることが分る。更にフロイトの「人格論の三分説」(イド、自我、超自我)、「リビドー変遷理論」、「芸術と精神分析論」によって有島の二元対立と創作活動との關係を考察する。「一房の葡萄」の盗み、後悔、叱責と許し、仲直りという線がキリスト教的和解の線であること、この体験が有島特有の女好きの遠因になっていること、等を説明してある。「片輪着」の原典」ではサバティエ著『アツシジの聖フランチェスコ』第三章「千二百九年前後の教會」に童話の元となつた話がある、という紹介をする。

3. 「有島の少女偏愛」8歳から15歳位までの
童女、少女に対する有島のもの狂おしいばかりの執着と偏愛は異常と言えるだろう。有島の性格にとって本質的なものであるだけに、研究者にとっても究明すべき課題である。次の二つの原因・理由が一つとなり有機的に働いて偏愛言動となっていると考えられるが、特に第二の原因が主となっている。第一は先天的な性質による。第二は後天的な性向による。つまり抑圧に反動する補償・代償としてであり青春を取り戻すための本能的自然的傾向によるためである。26歳の武郎自身かく余りに小児に似たる余が心よ」と言っているように生れつき子供っぽいところがあった。9歳で学習院予備科編入以来、札幌農学校卒業(23歳)、予備見習士官(24歳)、米国留学(25歳)まで青春時代を男子のみの環境で過ごした。薩摩出身有島家の厳しい長男武郎への羨、札幌時代はピュリタニズムの影響下、敬虔なキリスト者と見做されるとそれらしく言動して

いた。子供の時こそ体は弱かったが(「一房の葡萄」)、青年期の武郎の体は健康そのものになっていた。さすが「精力家の父・武」の息子である。学習院時代は男色の圧迫、札幌時代は性欲と聖書を対立させ自慰行為に悩んでいた。性欲が抑圧されている場合、人一倍強い性欲に応じたエネルギーが蓄えられていた。ユング"説に従えば、武郎の無意識の性的態度はますます幼見的・原始的になっていた。この傾向は留学時代から出はじめている。13歳のフランス、15歳のリリーに対する態度は「ボーイフレンド」として対等であることは「フランスの顔」「迷路」によって分る。26、27歳の青年の振舞ではない。フランスは武郎にとって「永遠の女性」になる。6歳の時、「一房の葡萄」の美人教師の愛を受けて以来、女性への憧れはつづいてきたが自由な男女交際も出来ずに10代は終っている。この代償がフランス、リリーへの限りない

思慕となって童貞青年をして彼女達を
神聖視させることになった。自己の本当の
声を聞かす"外界にペルソナを合わせて
貴重な青春時代を過ごしてしまった(「リビン
グストン伝」の序)。二度とない20代を自己
を欺いて過ごしてしまった後悔の念は深
い。30代に入った童貞青年が"青春を取り
戻すため、これから青春を迎える少女を愛
することは容易に考えられる。武郎は無意
識の中であせっていた。この無意識が
実際の態度に出ると見知らぬ15の乙女
に突然キスをするという破廉恥な行
動となる(明治41年7月29日 日記)。

Ⅲ その他の作品

1. 「迷路」について（有島武郎の棄教への一考察）神と直接の交換をした事の絶無、贖罪論を理解できず、未来観（終末観）に疑問、日露戦争によってキリスト教国民の裏面を見る。

2. 「実験室」初出作には有島の潜在信仰が吐露してしまった文章が散見する。即ち、妻の死因究明を解剖によって実証した後、空しさ襲われた三谷医師の突然の火の洗礼による新生物語である。改稿作の主題は科学者の目的至上主義の誤謬とそれによる内部腐蝕を自覚した者の苦悩である。そして主人公・三谷医師は有島が教授の道を進んだ場合の仮想自己になっている。「実験室」は〈思想界に僕相當の寄與はし得た〉という有島の自負は、自然科学に対する警告を含んでいる。それでは農学士でもある有島の自然科学観をまとめると次の通り。科学精神は、芸術のために必要な肥料であるばかりでなく、人間が陥りやすい誇大し過ぎの誤

りを訂正する役目もあるのだが、「科学する」とは〈智〉の働きであって人間全体の活動ではない。知情意が人間の活動全体を占めている。そして人間の自己の本質は愛であり、知情意は愛に支えられ三位一体となっている。故に智が独り働く所に自己全体が働くと考えた自然科学者や専門家は片輪者、機械、悪魔となりやすい。

IV 葛藤文学

1. 有島にとって最も関心が深い聖書の中の話は「姦淫の女」と「ユダの裏切り」という内容的集計結果を得ていた。「姦淫の女」をマグダラのマリヤと理解する有島にとって、マリヤとユダは〈二人ながら聖書に於ては一例を見ざる二大性格なり〉(明治36年9月22日、25歳)という認識をもっていた。姦淫と裏切り、妬み、憎しみ、恨みの面から有島の代表作を含む二十の著作を見てみる。果せるかな底流には良心とエゴイズムの葛藤が渦まいている。
2. トルストイ「暗の力」を読み終えた有島は〈彼の倫理、宗教観はこの一篇の到る所に漲り、而も甚だ人の心に逼るものがある。〉と評する。続いて、主人公は外見は悪党に見えるが心の中は臆病で良心的である、一方女主人公の性格は女の奥底の最も恐ろしい性質を見せている、等の登場人物評を述べる。尊敬するトルストイが実行の人であることは、後日、狩太有島農場解放を実行する際の

精神的力みとなる。トルストイは神の世界と悪魔の世界、左手と右手の深刻な生涯をかけての戦闘に確乎たる神への信仰の勝利を遂げている。一方、有島は良心とエゴイズムの葛藤と煩悶の末、燃え盡きている。神と悪魔と人間、良心とエゴイズムと人間、これこそ本格的な文学にとって永遠の主題なのである。トルストイ、有島、漱石、然りである。